

2023年4月23日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「憐れみは決して尽きない」

聖書：マタイによる福音書26：17～30

過越祭でもたれる晩餐での出来事。そこでイエスを裏切る者が言い当てられる。14節から見ると、十二弟子の一人、イスカリオテのユダがイエスを裏切る行為に出る。銀貨30枚で。この「銀貨三十枚」とは、ゼカリヤ書を見ると奴隷の賠償金、売買価格と見られている。ここでイエスは、一人の奴隷として扱われていることになる。イエス・キリストは、最後の最後まで、低き者として位置づけられる。あのクリスマスの出来事も、家畜小屋で生まれ、飼い葉おけに寝かされるといところから始まる。神が人となられるということは、低みに立つということであった。

過越の食事の席で、一人の裏切りが預言される。イエスは「人の子を裏切るその者は不幸だ。生まれなかった方が、その者のためによかった」という。この言葉は非常にきつい。何故そんなことを言うのか？ 実はこの言葉は、イエス御自身に向けられた言葉でもある。神の御計画で十字架へと向かうために生まれたイエス。自分自身のことを知るイエスが、十字架の迫りの中で、この世に「生まれなかった方が」良かったと、自分自身に言葉に向け、また主の御計画の中に選ばれたユダもまた、ご自分と同じ言葉に向けたという理解があるとされる。

もう一つ、23節のところでイエスはユダに対し「わたしと一緒に手で鉢に食べ物を浸した者が、わたしを裏切る」というが、「わたしと一緒に」とは、主の御計画の中に「わたしと一緒に」あるということ。キリストの十字架の出来事の中にあるという意味でもあろう。私たちには、到底理解できない事柄ではあるが、しかしそこにも、主の慰めがあり、主のお支えがあるということを知りたい。

26節からの「主の晩餐」には、あの裏切り者のユダはいないと見る人たちがいる。裏切り者、罪人は外されて「主の晩餐」が成されたというのであるが……。もし、裏切り者を外すというのであれば、十二弟子は皆外されることになる。この後、ペトロはイエスを三度知らないと言って裏切る。その他の弟子たちもイエスが捕らえられると、イエスを置いて逃げてしまった。

イエスは、弟子たち全員がご自分を裏切る者と分かっているが、「主の晩餐式」を執り行っていくのである。私たちは決して清いものではない。ただ、主の憐れみと赦しの下にある者であり、主の「憐れみは決して尽きない」ことを知りたい。「主の晩餐」には、主の愛が満ちている。(神谷)